

黙示録の記録はすべて「主の日」にいる記録ですか

使徒ヨハネは、七つの会衆に書き送るべき啓示を受けるために「主の日」に招かれています。

つまり、その出来事は、「現在」起きていることとして描写しているということです。
「わたしは靈感によって主の日に来ており、…七つの会衆に送りなさい」(啓示 1:10)

そして、この記述は 3 章で終わっています。

ヨハネは啓示全部を一気にぶっ通しで受けた訳ではないでしょう。

4 章から、また別の啓示を受けます。

ヨハネに見せるべき、あるいは書き留めさせるべき啓示がある時、その都度、霊的な高められた状態へと招かれています

「これらのことの後、わたしが見ると、見よ、開かれた戸が天にあった。そして、わたしが聞いた最初の声はラッパのようであり、その声がわたしと話して、「ここに上れ。必ず起きることをあなたに示そう」と言った。これらのことの後、わたしはすぐに霊の力の中に入った。」(啓示 4:1 - 2)

それで、ヨハネのスタンディングポジションが、いつどのように変わっているのかを見極めることは、重要です。

黙示録の初めの方で霊によって「主の日に来ている」と書かれているので、その全体が、主の日（エホバの日、ハルマゲドンにいたる、世の終わりの日）にいる状況で書かれていると思いがちですが、実際には、例えば、「さて千年が終わると…」といった具合に、千年後の景色を目の当たりにしていますし、「以前のものは過ぎ去った」と過去形で記していますので、常に「主の日」にいるのではなく、内容によって、スタンディングポイントは変化しています。

黙示録は、同一の出来事を、様々な場面で、別の角度、観点から描いていますので、これらを時系列的に捉えてゆく上で、この見極めは大変重要です。

とりわけ、この立ち位置の変化は 17 章に記されている、時代の変化に伴う世界強国の興亡についての記録は注意を要します。

もし、この 17 章においてもヨハネが「主の日」にいるとすると、多くの矛盾点が出てきます。

例えば、「そして七人の王がいる。五人はすでに倒れ、一人は今おり、他の一人はまだ到来していない」(啓示 17:10) という記述ですが、これが主の日であるとする、古代ローマ帝国はすでに過去のことなので、そしてその時、第七世界強国となっているはずなので、「そして七人の王がいる。六人はすでに倒れ、一人は今おり、これから到来するものは何も無い…」とみ使いは語るはずだからです。

では、この時のヨハネの時間的、時代的位置はどこでしょうか。

17章の始めから、新ためて検証して見ましょう。

しかし、その前に、さらに前のひとくくりをまとめておくことにしましょう。

7つの封印が順に解かれてゆく記述で、7番目の封印が開かれると第一から第七のラッパが順に吹かれ、そして16章の終わりの記述は、最後の鉢が注がれた時点で「大バビロン」の裁きがあり、滅ぼされています。

そして17章からは場面が変わって、改めて、大バビロン、そして緋色の野獣に関する詳細な記述になります。

それは、「さあ、多くの水の上に座る大娼婦に対する裁きをあなたに見せよう。」(啓示 17:1)

というみ使いの誘いの言葉から始まります。そして続く次の言葉です。

「そして彼は、霊の力のうちにわたしを荒野に運んで行った。」(啓示 17:3)

短い言葉ですが、非常に重要です。

さて、このみ使いの行動はいったい何でしょうか。この後をずっと見ても、それが「荒野」でなければならない理由は何ら見いだせません。

いずれにしても、幻を見せながら、解説し、会話をするというスタンスは何も変わらない訳ですから、そのまま、そこで、話し続けても、何ら問題はないはずで。

では、み使いのこの計らいは何のためでしょうか。その真意は明確には、当のみ使いに尋ねてみなければ分かりませんが、一つだけはっきり言えることは、スタンディングポジションが移ったということです。この経験でヨハネもそれをはっきりとわきまえたでしょうし、読む私たちも、それを意識して、次の言葉を読むことになります。

み使いはここで、ヨハネに、「七つの頭と十本の角を持つ野獣の秘義をあなたに告げよう。」と述べて、緋色の野獣について詳しい情報を伝えますが、この話の中で最も重要な要素は何でしょうか。

明らかに「順番」です。

なぜそう言えるかと言うと、み使いは幾つかの数字や序数をあげ、その順番を示し、タイミングを計る語彙をしばしば用いているからです。

「かつていた」「今はいない」「上ろうと」「かつてはいたが」「今はおらず」後に」「見る時」「すでに倒れ」「今おり」「まだ」「少しの間」「かつていた」「今はいない」「まだ王国を」「一時のあいだ」。この短い文の中に、これだけ、時間を表す語句、順序を示す言葉を用いているのです。

こうした語句に注意を払いながら読んでみて下さい。

「あなたの見た野獣はかつていたが、今はいない。しかし底知れぬ深みからまさに上ろうとしており、そして去って滅びに至ることになっている。こうして、その野獣がかつ

てはいたが、今はおらず、後に現われるようになるのを見る時、地に住む者たちは驚いて感心するであろう。」(啓示 17:8)

「ここが知恵の伴うそう明さの関係してくるところである。七つの頭は七つの山を表わしており、その上にこの女が座っている。そして七人の王がいる。五人はすでに倒れ、一人は今おり、他の一人はまだ到来していない。しかし到来したなら、少しの間とどまらなければならない。そして、かつていたが今はいない野獣、それ自身は八人目の王でもあるが、その七つから出、去って滅びに至る。」(啓示 17:9 - 11)

これらの記述からこの時点のヨハネは西暦一世紀にいることは明らかです。

啓示 13章でも同様の獣が登場しますが、こちらの10本の角は「すでに王権を受け」その権威を持って具体的な行動をしています。しかし17章では、この野獣についてはすべて「将来」の事として表現しています。

「あなたが見た十本の角は十人の王を表わしている。彼らはまだ王国を受けていないが、一時のあいだ野獣と共に王としての権威を受けるのである」(啓示 17:12)

この野獣について「啓示の書—その最高潮・・・」という出発物はこう述べています。

「野獣はかつていた」。そうです、それは国際連盟として1920年1月10日以降存在し、・・・国際連盟は世界の平和を保つことに失敗したため、事実上、無活動の底知れぬ深みに陥り、1942年には過去のものとなっていました。

緋色の野獣は確かに底知れぬ深みからはい上がって来ました。1945年6月26日、・・・国連は実際、生き返った緋色の野獣にほかなりません。」(啓 34章 247 ページ 5 節)

これによると、「かつていたが今はおらず」の「今」はいつでしょうか。

国際連盟が消え、国際連合が出没するまでの間です。つまり 1942 年から 1945 年の約 3 年の間です。

となるとヨハネは霊によって西暦 1943,4 年ごろに来ていたということになります。

しかし、聖句は「あなたが見た十本の角は十人の王を表わしている。彼らはまだ王国を受けていない…」(啓示 17:12) と記しています。

そしてこの出版物は「10人の王は国連加盟国である」という説明の後で続けてこう記しています。

「1世紀当時、『十本の角はまだ王国を受けていませんでした』。しかし、主の日の今、「王国」、つまり政治上の権威を持っています。」(啓 35章 254 ページ 12 節)

「今」が 1942-3 年ごろだと言ったかと思うと、その直後、舌の根も乾かないうちに、突如、「今」は「1世紀当時」になっています。何の根拠も、説明もなく、数秒の間に 2000 年もすっ飛んでいいのでしょうか。17:11 を「主の日」に来ていて記したヨハネはいつ「1世紀当時」に戻って、続く 12 節を書いたのでしょうか。